

# 『ブッデنبロック家の人々』論考

## ——「教養市民層」の視点から——

川 戸 れい子

### 【はじめに】

『ブッデنبロック家の人々 (Buddenbrooks, 1901)』(以下テキスト引用の際にはBb.と略記, その後の数字は頁を示す) と言えば, トーマス・マンの作家としての地位を確かなものとした作品として名高い。ノーベル文学賞の授賞も主にこの作品を対象としたとも言われる。副題は「ある家族の没落」であり, 豪商であった一族が, 代を経るうちに没落していく様を描いているのだが, その没落の因は, 健全な市民性の中に, 芸術家的な要素が侵入して来ることにあるとするのが定説となっている。即ちその後もマンのテーマとなっている芸術家対市民, 健康な生に対する病的なもの及び死の魅惑という, 二元論的対立が, この作品においても主調を成しているというのである。本論はこの定説に異を唱えようとするものではない。しかしこの作品は全く別の面から見ることもできるのではないか。近年盛んになったドイツの「教養市民層」についての研究が, 筆者に示唆を与えてくれた。トーマス・マンは兄ハインリヒとは異なり, ブルジョア作家の代表とされ, 殊に『非政治的人間の考察』以前の作品は, 社会的要素の乏しい, むしろ耽美的な傾向を持つと

---

恵泉女学園大学 人文学部紀要 第10号 pp. 91~pp. 104, 1998

「『ブッデنبロック家の人々』論考」

——「教養市民層」の視点から——

川 戸 れい子

考えられているが、『ブッデンブローク』には、思いのほか多くの社会情勢に関する記述があり、それが単に作品中の世界に時と場所を与えて、現実性付与の下支えとなるのみならず登場人物の意識と行為に有機的に関連付けられている。

描かれているのはヴィルヘルム時代とその前夜、プロイセン王国がドイツを統一し、第二帝政の地盤を固めて行く時である。場は中世に隆盛を極めたハンザの盟主たる都市リューベック（作中にリューベックという地名は一度も現れない 拙論『トーマス・マンと二都』を参照されたい<sup>1)</sup>）。伝統に裏うちされた誇りに生きる富裕な商人一族の生き方と、時流との齟齬こそが「没落」の原因であることが、作品から見て取れると考える。『ブッデンブローク』はすぐれて、社会派の作品であると言えるのではないか。

ところでヴィルヘルム時代の時流の一つが上に挙げた「教養市民層」の台頭と支配階層化である。旧来ドイツ地域にあった、貴族、都市門閥（商人富裕層）、庶民という序列が崩れ、プロイセン官僚機構を構成する大学出のプロテスタントが優位を占めるに至った。貴族も大商人も二流の地位におとしめられ、南ドイツとライン地方に多いカトリック教徒は、周縁に押しやられた<sup>2)</sup>。この教養市民層による支配は、ドイツ特有の現象で、例えばイギリス、フランスには見られない。この現象は、ドイツが、中央集権と産業革命による近代国家化において遅れをとったこと、および近代的ブルジョアジーの形成が十分でなかったことと無関係ではない。しかし教養市民層の栄華も、それが確立したと同時に下降線をたどる。時代は20世紀へ、そして第一次世界大戦へと向かうのである。

本論で取り上げる『ブッデンブローク家』はプロイセンに近い北ドイツにあり、プロテスタントの大商人であった。古い家柄と豊かさを誇り、自由ハンザ都市に深い愛着を持っていた。だが彼らの自意識は、周囲から乖離して行く。

ここでは19世紀北ドイツの市民とその階級意識という視点で、『ブッデンブローク家』がいかにして没落して行くかを考えたい。その際、登場人物と「教養」の関係に特に注目することになる。

## I. 『ブッデンブローク家の人々』の階級意識

### 【上流社会】

「コンズル・ブッデンブローク夫人は、……横の肱掛け椅子のかけていた夫のコンズルの顔を、ちらっとうかがった (Bb. 7)」。コンズルとは領事のことであり、一種の名誉職・称号である。名誉ある家柄であることが、冒頭の部分からしてうかがえる。また、「しばらく前に買い取って、家族が移り住んだばかりのメング通りの宏大な古い邸宅 (Bb. 9)」という記述は大邸宅を購入できる財力を示す。ブッデンブローク家、穀物問屋「ヨハン・ブッデンブローク商会」を営む。名誉も資産もあるこの家の人々は自己の社会的地位・階級をどのように意識していたのか。それを示すのが、娘トーニの養育係イーダ・ユングマンについての次のくだりである。「上流社会の一流家庭と二流家庭, 中流の一流家庭と二流家庭とを (zwischen ersten und zweiten Kreisen, zwischen Mittelstand und geringerem Mittelstand) はっきりと区別し, 自分が一流の上流家庭に仕える召使であることに誇りを持っていた (Bb. 11)」。雇人の、主家の社会的地位に対する意識は、雇主のそれを如実に反映する。従って、ブッデンブローク家の人々が己の階級に対して持つ意識も、ほぼ同様と考えてよいであろう。

ところで本論で「階級意識」という場合、マルクス経済学で定義されているような厳密な意味で言うのではない。人の社会的地位・階級についての一般的な意識、むしろ感覚的なものと考えていただきたい。上に引用した「上流社会の一流家庭」という言い方にしても、“erste Kreisen”であって、“obere Klassen”ではない。“Kreis”は元来「円」であり、「圏」または「範囲」、「グループ、仲間」を意味する。複数の場合に「社会」、「～界」の意味でも用いられるが、“Klasse”に比べると、社会・経済的な意味合いの薄い語である。さて、上述のくだりの後に客たちが集まって来る。医師、牧師、参事会員、問屋商人等、ブッデンブローク家と同様に地位も財産もある人々である。新居のお披露目の日であって、転居祝いに贈られた品物も並べられている。「贈りものが、低い階級の家庭から届けられたものでないことが一目でわかる (Bb.

13)」。ブッデنبロック家の交際範囲が知れる。

社会的地位と財産がここに集まっている人々を一つの“Kreis”にしているのだが、興味深い点が幾つかある。コンズル・ブッデنبロックには腹ちがいの兄がいるのだが、彼はこの席に招かれていない。小売店の娘と結婚し、自らも小売店を営むようになったことで勘当の身である (Bb. 15)。小売業は格下に見られていて、ブッデنبロック家の“Kreis”には入れないのだ。ブッデنبロック家の所在する、都市リューベックを造り上げ、自由都市にまでしたのはハンザ商人である。そしてハンザ商人とは大規模な遠隔地貿易に従事するものであって、小売業ではない。つまりリューベックでは小売店は物の数に入らないというわけである。

第二部にブッデنبロック家の記録を記した帳面が出て来る。「16世紀の終わりごろ、ブッデنبロックを名乗る男が、パルヒムに住んでいたというのが、知られている最も古い先祖であって、この男の息子はグレイボーで参事会員になったそうであった。さらにブッデنبロックなる仕立屋が、ロストックで結婚し、『はなはだ裕福に暮らし』——これには傍線が施されていた (Bb. 39~40)」とある。さらにこの物語を通じて、ブッデنبロック家のライヴァルとなっている新興勢力のハーゲンシュトレーム家は、「この町に住むようになってからまだ日が浅く、父親のハーゲンシュトレーム氏は、フランクフルトの若い婦人と結婚していた。……古い伝統をもっている家の人たちには、その婦人と結婚したことで、少し頭を傾けさせた (Bb. 43)」。そして、「息子のコンズルも未だに社交界にほとんど出入りができなかった (Bb. 278)」。伝統が重要なのだ。

以上から、ブッデنبロック家及びそれと同等とされている階層は、まず金持であり、それも長い年月にわたって裕福な古い家柄でなくてはならず、生業は問屋商であるか、または医師、聖職者のような専門的で資格を要する職業でなければならないことがわかる。こうした人々が上流社会を構成しており、ブッデنبロック家の“Kreis”なのである。

### 【貴族】

富を力の源とする古い家柄の大商人、これは都市門閥である（イタリアの都市門閥は農地を取得して貴族化する傾向があったが、ドイツでは少なかった）。では都市門閥よりさらに上位の階級である筈の貴族を、ブッデンプローク家の人々はどう見ていたのだろうか。トーニについて、「母親の実家のクレーガー家の貴族趣味は、小さいトーニ・ブッデンプローク令嬢のなかにも、うごめいていた（Bb. 42）」とある。「多くの通行人がコンズル・ブッデンプロークの小さな令嬢を知っていて、朝の挨拶をした（Bb. 42）」。「周囲からも令嬢として扱われていたトーニは、なかなかのおてんば娘で、たびたび町の弱者に悪さをし「犠牲者の誰かが威しの文句を言うと、……『わたしに手を出すつもりなら、出してみよ！ あんた知らないんなら教えて上げるわ、わたしはコンズル・ブッデンプロークの娘よ。』」と言わんばかりであった（Bb. 45）」。「大変な上流意識である。トーニはこのじゃじゃ馬ぶり故に、寄宿学校に入れられる。その学校は「だれから見ても上流家庭であることが確かな家庭の子女だけを受け入れる（Bb. 59）」のであった。そこでトーニは本物の貴族に出会う「このアルムガルトは、初めの日からトーニに強い印象を与えたが、それは、トーニが初めて見る貴族の娘だったからであった。アルムガルトは、……貴族がどんなものか少しもわかっていないらしかった。この『貴族的』という言葉が、トーニの小さな頭の中にこびりついてしまった（Bb. 60）」。「初めて会った自分よりもっと上流の人間、これ以後トーニはひたすら「貴族的」なことを追い求める。彼女にとって「貴族的」とは、「贅沢、豪華」に外ならない。「エレガントなネグリジェほどこの世で貴族的に見えるものはないと考えた（Bb. 136）」。「貴族がどんなものかわかっていないのはトーニの方らしい。

トーニの長兄トーマスは次のように言う、「貴族の中には、商人を人間扱わないのも二、三あってね（Bb. 311）」。「兄の方はやみくもに貴族に憧れたりしてはいない。「そういう貴族には、社会的にいくぶんでも対等の位置を失わないように、思い切った芸当を少しやってのける必要もある（Bb. 312）」。「彼は貴族を、自分よりも上位にある、対立的な階級と考えている。トーマスは社会的上昇指向も持っていて、商会の古いのれんを守るべく商売に精を出し、都市の要職である参事会員にも選ばれた。しかし「参事会員に選ばれたとき

から、達成できるものは達成してしまっていた。……『市長の右腕』であることは、敵側と考えられる人たちも否定するのは困難であった。しかし、自分では市長になれなかった (Bb. 417)」。トーマスは市民として、商人として可能な限りの最高の地位まで上りつめた。だが彼の上位には貴族があり、そして市長がいる。

## II. 『ブッデンブローク家の人々』が生きた時代

### 【階級秩序の変化】

物語の最初の日、詩人のホフステデー氏は、転居を祝う詩に「1835年10月」と年月を入れている。フランス革命とナポレオン戦争後（賀詩のくだりの前にはナポレオン軍がリュベックに進攻して来た時の思い出話が出る）にプロイセン王国とオーストリア・ハンガリー帝国がフランスに対抗して結んだ“der Deutsche Bund”の時代、君主制巻き返しの時代である。一方1834年に、作中にも記述のある関税同盟が成立し (Bb. 28～9)、当の1835年にはドイツ最初の鉄道が運行を開始した。産業構造においても国家体制においても、後進的であったドイツ・オーストリア地域が、近代化を急いでいたのである。

物語の終わりは吉田次郎によれば1877年の晩秋<sup>3)</sup>。一族直系最後の男子ハンノの死後、母ゲルダがリュベックを去る、別れの小宴の場面である (Bb. 514～17)。描かれた時間は42年間ということになるが、一族の結婚、死亡、誕生等の出来事が描かれる間の随所に、周囲の事件が織り込まれる。例えば、「取引所の空気が、面倒なシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン問題で揺れ続けていた (Bb. 121)」という記述が、その後続くこの時期のリュベックの、従って作中でも最大の社会的事件である革命騒ぎの前触れとして出て来る。「今まで主人思いで実直者の感じであったトリーナが、ふいに露骨な反抗をしたというのであった。……若い人足の中には、反抗の新しい精神がこっそり忍び込み始めたことを、態度で感じさせる者が、一人ならず現れていた (Bb. 121～2)」。次いで「1848年10月上旬のある日のこと (Bb. 122)」で始まる革命事件の記述が、13ページ余りにわたって続く。フランスの2月革命の波がベルリ

ン、ウィーンに及んでいわゆる3月革命を引き起こし、さらに半年を経てその余波がリュベックに到達したというわけである。この騒ぎは、革命ごっこという程度のもので、リュベックに直ちに実質的な変化をもたらすものではなかったが、一族には、コンズル・ブッデンブロークの岳父コンズル・レープレヒト・クレーガーが、騒擾による緊張と怒りで死亡するという影響を与えた。「レープレヒト・クレーガー、かつての当世風の紳士は、祖先のそばへ去った (Bb. 135)」。確実に時代が移り変わっているということを示す記述である。中世以来の階級秩序にひびが入り始めたのだ。

この事件のくだりで注目しておきたいことがある。前章ではブッデンブローク家の人々の階級意識として、自己の属する階級についての意識と、より上位の階級である貴族に対する意識について述べたが、彼らより下位にある人々に対する意識が、如実に現れている所がある。町の騒ぎが聞こえて来た時のコンズル夫人の「どうでしょう、革命が始まったのよ。……民衆よ (Es ist das Volk. Bb. 123)」。この“Volk”は特殊ドイツ的で複雑な含意の語である。ある時は「民族」を、ある時は「国民」を指す。ここでは、被支配者である人々、下層民という意味での「民衆」なのである。コンズル夫人自身は断じて“Volk”の一人とは思っていない。1989年の旧東独で、民主化を求める人々が叫んだスローガン：“Wir sind Volk! (わたしたちが国民だ)”と較べるなら、その違いは明らかである。また革命に怒るコンズル・クレーガーは、民衆に対して「下司ども (Die Canaille)」としか言わない。自分とは全く別の存在、同等の権利など認むべくもない存在という扱いである。彼にとって、支配階級である自分たちへの民衆の反抗は耐え難いことであったのだ。

### 【プロイセンの覇権】

この物語の42年間に起こったもう一つの重大な社会的・政治的な出来事はプロイセンのヴィルヘルムI世とビスマルクの下でのドイツ統一、1871年の第二帝国の成立である。作中では統一自体については一言触れられているだけであるが (Bb. 436)、プロイセンによる中央集権化と近代化が広がっていくことに関する記述は見落とせない。

まず関税同盟について、「プロイセンの発明したものに、ハンブルクが膝を屈して、同調できますかね？(Bb. 29)」と言われる。ハンブルクはリューベックにとって、ハンザにおける最大の盟友であり、リューベックの商人たちは、この時代にもハンブルクにシンパシーを感じていたのに対して、軍事大国プロイセンにはあまり好感をもっていないようである。イーダ・ユングマンについての記述も、「そのプロイセン女 (die Preußin, Bb. 11)」となっていて、ブッデنبロック家の人々とは異質の、よそ者のようだ。先代のヨハン・ブッデنبロック老人は、「イーダ・ユングマンにあまり好意を持っていなかった。(Bb. 10)」とまで言われる。小邦分立の長く続いたドイツの、良く言えば郷土愛、悪く言えば偏狭な排他性である。

「戦争と戦の叫び、……ブッデنبロック参事会員の新居の二階に並んでいる部屋でプロイセン軍の士官たちが、寄木細工の床の上を歩きまわって (Bb. 297)」いた。ドイツーデンマーク戦争である。「1865年の短い平和 (Bb. 297)」を挟んで、再び「戦争が始まり、……ハンノ・ブッデنبロックの町は、賢明にもプロイセンに加担をしていた関係で、富裕なフランクフルトがオーストリアを信じていたばかりに、自由都市でなくなったのを見て、ひそかにほくそ笑んでいられた (Bb. 297)」。今度は普墺戦争である。こうして戦勝を重ね、プロイセンは中欧における覇権を確立し、統一を果たす。プロイセン嫌いであった筈のリューベックはプロイセン側につき、とりあえず時流に乗ることができた。しかし「フランクフルトの大きな商會が倒産し、そのために『ヨハン・ブッデنبロック商會』は、一挙に二万ターラーという大金を失った (Bb. 297)」。ブッデنبロック家は乗りそこなったようである。6年ほど後にも、「町が関税同盟に加入して、小っぼけな小売店も数年で立派な問屋になれる時勢であって、すべてが活気にあふれて活動している現在『ヨハン・ブッデنبロック商會』だけは、時代の波が運んでくる産物からプラスを引き出すこともなく沈滞したままであった (Bb. 416)」。さらにある小売店の主人が参事会員になった時のこと、「トーマス・ブッデنبロックの祖父は、長男が小売店の娘と結婚したというので、彼を勘当したが、それが当時は当然とされていた (Bb. 454)」。トーマスは言う、「参事会の社会的水準が落ちたんで



すね。参事会の民主化ですか。よくないことですよ……商人として有能であるかどうかだけでは、きまりませんよ (Bb. 454)」。トーマスは、参事会員の水準に達するには財力だけでは十分でないと考えている。彼の価値観は祖父のそれとあまり変わらないようである。

これに対してライヴァルの、商人として有能なハーゲンシュトレーム家は、いよいよ隆盛に向かっていた。「この男の人柄の基調は自由主義者的な、寛大な考え方だった。……伝統と敬虔な気持の窮屈な束縛にしばられずに、自分の足だけの上に立ち、古いのれんなどには無関係であった (Bb. 279)」。

### III. 「教養」と『ブッデンブローク家の人々』

#### 【教養市民層】

前の章で、『ブッデンブローク』に描かれている時代に、プロイセンによるドイツ支配が進み、それによって起こった社会構造の変化が作中にも現れていることを述べた。伝統や格式にこだわるブッデンブローク家は、時代の流れに取り残されようとしている。その流れとは、プロイセンがドイツ地域における最初の実質的な統一国家形成を進める中で、地方の独立・自治が徐々に蚕食され、中央集権的に再編成されて行く政治体制の変化であり、前章に引用した、普墺戦争の結果、フランクフルトが自由都市の地位を失ったことが、その例である。だが中央集権体制を敷き、英、仏の先進中央集権的近代国家に対抗して行くためには、強力な軍隊だけでなく、効率的な官僚組織が必要であった。プロイセン＝ドイツにおいて、この官僚組織を構成するには旧来の宮廷官僚、即ち貴族階級出身者では十分でなかった。一方、英仏先進文明への対抗上、「文化」をドイツ的価値とする思想が起こり、その文化の担い手としての教養市民層が、社会的・政治的にも支配的な社会階層として形成されることになる。

そこで「教養市民層 (Bildungsbürgertum)」であるが、田村栄子によれば「イギリスやフランスにはみられない特殊ドイツ的概念であり<sup>4)</sup>」、言葉そのものが「比較的最近になって一般化したものである<sup>5)</sup>」。従ってそれについ

ての研究も、「ドイツにおいては……ようやく1970年代後半から始まるが、日本においては緒についたばかりである<sup>6)</sup>」。野田宣雄はクラウス・フォン・ドゥングを引用しつつ、「教養市民層の第一の特徴は大学教育を受けていることである。職業でいえば、次のものが教養市民層にかぞえられる。ひとつには、大学教授・ギムナジウム教師・裁判官・高級行政官僚・プロテスタント聖職者をふくむ広義の高級官僚、いまひとつには、医師・弁護士・作家・芸術家・ジャーナリスト・編集者等の自由職業<sup>7)</sup>」と言う。「教養市民層は圧倒的にプロテスタントである<sup>7)</sup>」。教養市民層はこれらの職種を独占することで行政・司法を握るとともに、「世論をつくりあげる文化エリート<sup>8)</sup>」となる。彼らは「フォルク（庶民）と対峙して形成され、フォルクに対する指導権を当然のこととしていた<sup>9)</sup>」。こうして教養市民層の支配階層化が進む中で、「貴族階級が覇権を失った<sup>10)</sup>」。さらに「社会的威信が経済的裕福さよりも重視され<sup>11)</sup>」、「カトリック教徒は、ごく少数の例外を別にすれば、カトリック教徒なるがゆえに教養市民層への参入を許されず、プロテスタント的教養市民層の文化が優越する第二帝政期にあって、精神的にも社会的にも『ディアスポラ』の状況に甘んずるほかはなかった<sup>12)</sup>」。

第二帝政期、ヴィルヘルム時代初期に教養市民層は最盛期を迎えるのだが<sup>13)</sup>、はじめに述べたように、この時期はまさに『ブッデンブローク』の時代である。教養市民層の台頭による、旧来の階級秩序の改変が、ブッデンブローク家の人々にどのように及んでいるのか、次にそれを見ていくことにしよう。

### 【ブッデンブローク家の人々と教養】

既にIIで見たように、ブッデンブローク家の人々は自分を貴族に次ぐ上流階級、民衆＝フォルク（Volk）に対しては支配者と思って来た。このフォルクは上記の教養市民層が対峙するフォルクと同義である。即ち彼らの頭にある階級構造は①貴族、②自己の属する富裕市民、③民衆である。だがそれは、上述の通り19世紀のこの時期、①教養市民層、②教養市民層に属さない貴族やカトリック教徒等の周辺層<sup>14)</sup>、③庶民と変わっていた。ではブッデンブローク家の人々は教養市民層であろうか、否である。彼らはプロテスタントである

(Bb. 211, 444ほか)。その点では条件を満たしているものの、彼らの上流意識を支えるのは古い家柄と裕福さであった。裕福さは社会的威信に劣る。そして何よりもこの家の人々は、社会的威信の源、教養市民層の条件である、大学教育を受けていない。

ブッデنبロック家の人々は決して、一般的な意味での無教養な人たちではない。それどころか、先代の老ヨハンを初めとして、上流階級の用語であるフランス語を流暢に操るし、トーマスについては「コンズルを際立たせていたものは、この町の学識のある市民の中でも桁外れの非実用的な教養の深さ (ganz ungewöhnlicher Grad formaler Bildung) だった (Bb. 279)」とされている。実際、ブッデنبロック家では教養、それも教養市民層において殊更価値を置かれた古典的教養を含めたそれを重んじていた。老ヨハン は、フランス勲員の息子のコンズルが唱える実践的理想に対して、古典的教養を擁護し、その息子のコンズルにしてから、娘の婿選びにあたって「あの人は教養人だ (er ist……feingebildeter Mann, Bb. 69)」と言って話を進める。しかしトーマスは「商人になって、いつか商会の主人になるように生れつき定められ、実科コースの生徒だった (Bb. 46)」。弟のクリスチアンはギムナジウムに行ったが、学業以外のことに関心があり過ぎて、「学者になることを断念した (Bb. 119)」。

だが問題は、トーマスが大学教育を受けていないこと、それ故に自分の栄達に限界があることを、無念に思っているという点である。Iの最後にトーマスは「自分では市長になれなかった」という箇所を引用した。その後このように続く、「だいたい大学教育を受けていなかった。……精神的教養と外面的教養の点でも、まわりの誰よりも勝っている自信があったから、正規の教育を受けていないというだけのために、生まれ育った世界で最高の地位につけない不満が、いつも心にくすぶっていた (Bb. 417)」。彼は友人に向かって言う、「ぼくたちは馬鹿だったよ。……あんなに早くから事務所に入ってしまった、学校を終わらなかつたのは (Bb. 417)」。達成できるものは達成してしまい、さらに上を望もうにも、自分ではいかんともしがたいという思いが、トーマスから気力を奪い、体裁をつくらうことだけの生活で神経を擦り切れ

させた。また彼は、商人という仕事にも十分なやり甲斐と誇りを持つことができなくなっていたようだ。「ああ、ぼくは悲観しそうだね。商人がますますつまらない存在になって行くのを見てね (Bb. 184)」。こうしたことが早い死を招いたと読むこともできよう。

ブッデنبロークの家運が傾いて行くのに対し、ライヴァルのハーゲンシュトレーム家では次男が「目を見張らせるような成績で学業を終わり、法律学者として町に定住するようになった (Bb. 163)」。一族の者が教養市民層入りをしたのである。後者が隆盛に向かって行くこととこれが、無関係に語られているとは思われない。トーマスに関しても「息子を二人持っていたら、問題なく次男にはギムナジウムを卒業させ、大学教育を受けさせただろう (Bb. 422)」と言われている。教養市民層の支配階層化が、『ブッデنبローク家の人々』に影を落としているのは明らかである。

### 【おわりに】

これまで見てきたのは、19世紀後半のドイツにおいてプロイセンによる中央集権化・近代化が進む中で、旧来の社会階層が解体し、特に教養市民層が台頭して来る様が、『ブッデنبローク』にはっきりと描きこまれているということであった。トーマスは教養市民層ならぬ自己の限界を感じ、生き甲斐も活力も失っていく。彼の死後、元々商売に関心のない妻ゲルダは、商会を解散し、残された一人息子ハンノの死によって、最後の望みも消える。富裕にして誇り高い都市商人層の没落である。

最上位の階級、貴族、トーニの学友アルムガルトの嫁いだフォン・マイボームは、所領の経営に行き詰まり、ピストル自殺する (Bb. 421)。貴族も生きにくい世の中になっている。トーニの青春に関わったもう一人に、トラーヴェミュンデの水先案内人の息子、トーニと相思相愛となった医学生モルテンがいた。持参金目当てにトーニに言い寄っていたグリーンリヒに、トーニから引き裂かれ、別れの挨拶をすることも叶わずに追い立てられた、モルテン。ブッデنبローク商会の百周年を祝いに来た父親が言う、「うちのモルテンもずっと前からドクトルになりまして……はやっているようです (Bb. 199)」。グ

リューンリヒが馬脚を現して離婚沙汰になった時、トーニは「ああ、パパ、やめておけばよかったんじゃないなくて (Bb. 148)」とつぶやく。グリーンリヒではなく、モルテンと結婚していれば……このトーニの後悔は、前章に引いたトーマスの「馬鹿だった」と照応する。変わり行く時代の流れの中で、人生の選択を誤った人間の嘆きである。

単なる時代背景として片付けられない程に、19世紀ドイツ社会の変化は、登場人物たちの運命と絡み合っている。教養市民層になれなかった人々の没落、『ブッデنبローク』をこのように読むことができる。

古典的教養を最も価値あるものとした教養市民層であったが、官僚支配と結び付いて行く中に、教養を身につける場、学校が変質して行く。「以前は古典的教養は、それ自身が目的であって、明るい装飾であった。……今度は権威、義務、権力、奉仕、履歴などという概念が、なにものよりも尊厳なものとして尊重されるようになった。……学校は国家の中の一国家になり、プロイセンの奉仕精神、直立不動の姿勢が蔓延し、教師は勿論、生徒までが役人風を吹かし、昇進の外のことは頭になくなり、権力者の鼻息を窺うことに汲々とした役人のようになった (Bb. 492)」。田村も『ブッデنبローク』を引用して、学校のこうした状況が、若き教養市民層である青年たちを青年運動へと向かわせ、彼らの一部がやがてナチズムにつながって行くと論じている<sup>15)</sup>。官僚主義に対する鋭い批判は、ナチに追われ、異国の地から自由と人倫を叫び続けたマンの後半生を準備するものであるように思える。

## 【注】

- 0) テクスト：Mann, Thomas : Buddenbrooks. 1975 Frankfurt a.M. Fischer Taschenbuch Verlag. なお訳文は概ね望月市恵訳（岩波文庫版）によるが、一部筆者が手を加えた。
- 1) 川戸れい子：トーマス・マンと二都（立川洋三他：『ドイツの言語と文学』所収）1995, 東洋出版
- 2) 野田宣雄：ドイツ教養市民層の歴史。1997, 講談社学術文庫 S.15
- 3) 吉田次郎：トーマス・マンを読む。1988, 松頼社 S.255

- 4) 田村英子：若き教養市民層とナチズム——ドイツ青年，学生運動の思想の社会史。1996， 名古屋大学出版会 S.29
- 5) 野田 S.13
- 6) 田村 S.29
- 7) 野田 S.14
- 8) 田村 S.30
- 9) 田村 S.29
- 10) 田村 S.28
- 11) 野田 S.14
- 12) 野田 S.15
- 13) 田村 S.30
- 14) 野田 S.15
- 15) 田村 S.53以下